

鹿児島県南さつま市におけるキタヤナギムシクイ *Phylloscopus trochilus* の観察記録

加藤 銀次¹・加藤 卯月²

A record of a Willow Warbler *Phylloscopus trochilus* on Minamisatsuma City, Kagoshima Prefecture

Ginji KATO¹ and Uduki KATO²

はじめに

キタヤナギムシクイ *Phylloscopus trochilus* は、イタリヤ・バルカン半島を除くヨーロッパ西部・スカンジナビア・西シベリア・ロシア極東部のアナドゥリ川までで繁殖し、冬季はアフリカ西部と東部および南部へ渡る（山形ら，2014）。日本国内では数少ない旅鳥として主に日本海側の島嶼に渡来し（大西・五百澤，2014），鹿児島県内においては2001年9月28日に奄美大島で標識された後に放鳥された記録（永田ら，2002）が県内初記録である。また，2007年9月26日には南大隅町稲尾岳で声が録音されている（大西・黒田，2012）。

著者らは，2016年10月29日，鹿児島県南さつま市大浦町大浦干拓においてキタヤナギムシクイ1個体（以下，本個体）を観察および撮影した。本記録は県内で3例目の貴重な記録となるのでここに報告する。

1 観察者

大迫義人，加藤銀次，加藤卯月，熊谷正弘，小園卓馬

2 観察日時・場所

2016年10月29日8:50～17:00ごろ，鹿児島県南さつま市大浦町大浦干拓にて観察。

3 観察距離

約3m～10mの距離。8倍の双眼鏡にて観察し，撮影には望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラを使用した。

4 観察した環境

大浦干拓は薩摩半島南西部に位置し，東シナ海に面している。東は大浦川，西は笠石川に挟まれており，干拓内には水田が広がっている。観察個体は干拓中央のやや東寄りにある農業用堆肥置き場で単独で見られた。同地には堆肥が高さ1mほどに盛られており，その両脇にはヨシ *Phragmites australis* が生育していた。周囲には日陰ができるような木等はなく，全体的に日当たりのよい開けた環境であった。また，同地ではキタヤナギムシクイの他，スズメ *Passer montanus*，ホオジロ *Emberiza cioides*，キセキレイ *Motacilla cinerea*，ハクセキレイ *M. alba* を確認した。

5 形態に関する記述

本個体はムシクイ属 *Phylloscopus* としては翼と尾が長くスマートな体形であった。頭から背から腰，上尾筒にかけての上面は灰色みのあるオリーブ褐色で，喉以下の体下面は黄白色，脇では特に黄色みが強かった。頭に頭中央線はなく，顔には眉斑と過眼線があり，黄白色の眉斑はおおむね明瞭で前半では太めで上嘴基部に達しており，後半では細くぼやけ気味であった。過眼線は暗色で全体的に不明瞭であったため，あまり目立たなかった。ただし，上部は眉斑をともなっており，下部と比較すると輪郭が明瞭であった。翼に翼帯は見られず，初列・大雨覆，各風切と尾は黒褐色で，上面と同様な灰色みのあるオリーブ褐色をした羽縁が認められた。図1より，静止時の初列風切の突出は長く，三列風切の露出部とほぼ同程度の長さで，隣り合う初列風切先端間の長さは第5羽と第6羽の間が最も長かつ

1 南さつま市立大笠中学校3年

2 南さつま市立笠沙小学校6年

た。また、図2より、初列風切第6羽から第8羽の3枚については外弁欠刻があることを確認した。上嘴と下嘴先端は黒褐色で、会合線から下嘴の大部分と嘴基部は黄色であった。脚は黒褐色、趾は全体的に黒みがかった黄色であった。

近縁種のチフチャフ *P. collybita* は観察個体と同様に翼帯や頭中央線がなく体色も似るが、以下の5点が異なる。①体形は丸みがある。②翼が短く、初列風切の突出は三列風切の露出部の半分程度。③隣り合う初列風切先端間の長さは第4羽と第5羽の間が最も長い。④初列風切の外弁欠刻は第5羽から第8羽までの4枚に存在する。⑤嘴と足は黒い。(大西・五百澤, 2014; 永田ら, 2002) これらの点より、本個体はキタヤナギムシクイと判断した。



図1 大浦干拓で撮影したキタヤナギムシクイ
翼と尾は長く、初列風切の突出は三列風切の露出部と同程度の長さ(2016年10月29日 撮影:加藤銀次)。



図2 キタヤナギムシクイの左翼
初列・大雨覆、各風切は黒褐色で、オリーブ褐色の羽縁がある。初列風切第6羽から第8羽については外弁欠刻が認められる(2016年10月29日 撮影:加藤銀次)。

6 観察した行動

加藤卯月が観察個体に気付かずに接近した際に警戒し、ヨシの茂みの中へ入ったところを発見した。その後、茂みから出てきて、堆肥に集まる虫を捕食するといった行動を繰り返した。その際に観察者から3mほ

どの距離まで近寄ってくるがあった。捕食していた虫の種類については確認できなかった。また、茂みから堆肥に飛び移る際には小刻みに羽ばたき直線的に飛んでいた。堆肥の上ではホッピングで移動していた。広範囲に動き回ることではなく、行動範囲は茂みの中と堆肥上に限られていた。鳴き声については確認できなかった。

7 考察

本個体は、体下面の黄色みが強く、初列風切および尾羽の先端が尖っていた。また、尾羽は先端の磨耗が顕著に認められ、特に左側中央尾羽では先端が欠損していたため幼羽である。したがって観察個体は当年生まれの幼鳥であると考えられる(板谷・有山, 2015)。

キタヤナギムシクイを観察した翌日30日に同所でノゴマ *Luscinia calliope* を確認した。その際にノゴマもキタヤナギムシクイと同様にヨシの茂みに入り、時折堆肥に集まる虫を捕食していた。このことから、同所のような環境は潜行性が高い鳥がよく利用すると考えられる。

8 謝辞

本観察記録を書くにあたり、所崎聡氏、池俊人氏には執筆内容や書き方について多くの教示及び助言をいただいた。なお、所崎氏には年齢同定や過去の記録についても教示いただいた。この場をお借りして厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 板谷浩男・有山智樹(2015) 沖縄県与那国島におけるキタヤナギムシクイ *Phylloscopus trochilus* の観察記録. 日本鳥学会誌, 64: 257-260.
- 永田尚志・鳥飼久裕・斉藤武馬(2002) 奄美大島におけるキタヤナギムシクイ *Phylloscopus trochilus* の日本初標識記録. 日本鳥学会誌51: 87-91.
- 大西敏一・五百澤日丸(2014) キタヤナギムシクイ. 日本の野鳥650(真木広造・大西敏一・五百澤日丸): 542, 788pp. 平凡社, 東京都.
- 大西敏一・黒田治男(2012) 兵庫県南西部におけるキタヤナギムシクイ *Phylloscopus trochilus* の観察記録. 日本鳥学会誌, 61: 304-309.
- 山形則男・吉野俊幸・五百澤日丸(2014) 新訂 日本の鳥550 山野の鳥, 415pp. 文一総合出版, 東京都.